

地元の明日をつくる商品

鹿児島県・鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 3年 木田 夕菜

その手書きのポップ広告には、7人の女子高生と年配の女性5人が並んで写っていた。そして最後列の女子高生と年配の女性は、それぞれの片手を交差させて協同・協力を表す「×」マークを作っている。そして商品名よりも大きな文字で書いてあるのは、写真の高校生の校名と加工組合の文字。

実はこれ、ビワジュースやビワのシロップ漬けを使ったかき氷のポップ広告である。なぜ、高校生が写っているのだろう。広告にある「×」の意味は何。商品名の意味は。次々と湧いてくる疑問を処理できなくなった私は思わずお店の方に尋ねた。

「これは、高校生が考えて、加工組合と一緒に作った商品なんですよ。」

私は、全国で有数の温泉地にある地域の特産品市場に来ている。私の父が若い頃、仕事の関係でしばらく住んでいたこともあって久しぶりに家族でやって来た。かつお節の生産地としても名高いこの町は、昔は人口も多くにぎやかな町だったそうだが、今では町の中心街にも人はまばらで、シャッターの下りた店も少くない。

ただその一角だけは違っていた。今は休止しているフェリー乗船場の向かいにあるこの特産品市場には、ひっきりなしに車が入り出している。まだ、午前中だというのに、広い駐車場の多くは埋まっている。店に入ると、港町の市場らしく大きな大漁旗が何枚もディスプレイされていた。店の中には、地元の野菜や鮮魚、水産加工品などが所せましと並べられている。また、ここの名物となっているマグロの解体ショーの時間を知らせる大きな張り紙の前では、地元の水産組合の方が威勢のいい声を上げていた。

高校生が考えたというビワのかき氷を売る店は、店の左側入口から入ってすぐの場所にあった。ここでは地元の果物を使ったジュースやソフトクリームなどを販売している。この店の真ん中の一番前にそのポップ広告は張られている。

このかき氷は、地元の農産加工組合が参加して行われた企画提案会で高校生が提案したものだった。元々ビワの加工品を販売していた加工組合の商品を使って、何か新しい商品ができないものかと高校生がアイデアを考えたのだそうだ。

高校生といえば、私とほとんど年も変わらない。文化祭などで食べ物を販売することはあっても、普通の商店で、ましてこんなに人が集まる場所で一般の人に売る商品を考え、販売するなんて思いも寄らないことだった。ましてビワなんて私自身あまり食べたことのない果物だった。私が駐車場でビワのかき氷をほおぼりながら、母とそんな話をしていると、ふいに横に座っていた年配の女性が、私たちにこう話しかけてきたのだ。

「これを考えた高校生の中にも、食べたことがなかった子もいたみたいだよ。」
思いもかけないその言葉に私は、思わず聞き返した。その高校生は、今回初めて地元のビワを食べてその甘さに驚いたのだという。

そうか、そうなのだ。どうして、地元の高校生と加工組合が協力して商品を作るのか。きっとそれは、私たち若い世代にもっと地元を知り、もっと地元を好きになってほしいという願いが込められているのではないだろうか。高校を卒業すると地元を離れていく人たちも多い。そのために町から活気が失われてしまうという話を聞いたことがある。それは、若い人たちと地元のつながりが薄くなってしまっているからかもしれない。だから年配の人たちが多くなってしまっている加工組合の方たちと、高校生と一緒に、商品を考えたり、試作品を作ったりすることで、もっと自分たちの町や人をよく知ることができるようになるのではないか。

特産品市場の別の売り場には、地元の別の高校生が生産した「かつおみその缶詰」も並べられていた。また、離島の高校生が育て、開発したパッションフルーツジュースを地元の高校生が仕入れて、店頭に置いていた。

この店の活気は、こうした地元への思いが支えているのではないか。そしてそれは、次の世代を担うであろう私たちが主体的に参画できることで、世代間をこえたものとなっているのではないかと思えるのだ。

休止していたフェリーがこの夏から再開される。今後はより多くの地域から多くの人々がここを訪れるであろう。それにより私を含め、多くの若い人たちが自分たちでも地元でできることを考えるきっかけになればいいと思う。

高校生が作成したであろうビワのかき氷のポップ広告からは、組合の人たちと

高校生、全員の顔に笑顔がこぼれている。真ん中に書かれている「×」には、協同の意味だけではなく、活気や思い・願いを倍加させる「かける」の意味が込められているのではないか。ふと私にはそんな気がしてきたのだ。

